



芦屋川の開森橋手前より

■ はじめに

阪急電車の神戸方面から芦屋川に近づく、崖上にその建物の細長い姿が見えてくる。尾根の中腹のこんもりした緑の中、空に突き出す塔。操縦室のような窓。「船みたいだ」と子供心に思っていた。斜面に建つ他の建物は、眺望を意識してほとんどが東西に幅広なのに対し、その建物は不思議なほど東西に薄く南北に長く頂部が極端に小さかった。いつの頃からか、「山の船」は綺麗に塗り直され、「重要文化財 ヨドコウ迎賓館 旧山邑家住宅」（以下、山邑邸とする）となった。私が「山の船」の内部を初体験したのは、1989（平成元）年、山邑邸が保存修復修理を終え、一般公開された年である。

山邑邸は、（株）淀川製鋼所が所有する。1918（大正7）年、帝国ホテルの設計のために来日中のフランク・ロイド・ライトが、山邑太左衛門の別邸として設計した。ライトが日本で設計した住宅のうち、唯一、建築当初の姿で現存する建築である。年間13,600人（平成22年度実績）の来訪者があり、前面道路は「ライト坂」の愛称で親しまれる。貴重な建築作品として周知され愛されているこの建物だが、現在に至るまでは数奇な運命を辿ってきた。幾度も訪れた存続の危機のうち、1971（昭和46）年に持ち上がった建て替え計画と保存運動、そして現在の姿を紹介する。

■ 山邑邸保存運動-日本近代建築保存運動の魁

1971（昭和46）年10月、所有者である（株）淀川製鋼所が、山邑邸を取り壊しマンションを建設する確認申請を提出した。高度成長期の後期で、環境よりも経済活動を優先させた弊害が表面化し、公害や環境問題が深刻化した時期である。建築業界はまさにスクラップ・アンド・ビルド。東京ではライトの設計した帝国ホテルは保存運動の甲斐なく取り壊され、神戸では異人館がマンションやホテルに次々と建て替わった。

山邑邸取り壊しの動きに、それを差し止め保存しようとする地元住民や建築関係者の動きは早かった。近隣の人びとが署名運動を始め、専門家と共に行政と所有者に訴え、ジャーナリズムを動かし、世論を作った。これらの動きは、当時、都市・計画・設計研究所の所員で保存運動の先頭に立った

武田則明氏（元神戸山手大学教授）が『つどい』2007（平成19）年4月号に執筆された「近代洋風建築保存運動史（2）旧山邑邸の場合」に詳しい。建築の学術的価値を明らかにし、所有者や行政に保存を訴えると同時に、保存運動を環境問題としてとらえ、まちづくり運動として展開した様子が伺える。当時を振り返り、武田氏は保存運動への思いをこう語る。

「建物は所有者のものだが、それがあつた土地に存在して長い時間が経過すると、地域のアイデンティティを形成する。建物はまちにとって景観となり、建物を取り巻く風景は、近くに住み、働き、往来する人びとに共有されたかけがえのない空間となる。そんなまちを愛する人びとの思いを優先させるべきだと考えた」

■ 保存へのエネルギーの結集-自然と建築とのかかわり

「そこに建築技術者の誇りがあるとすれば、いかに自然の声を聞いたかということにのみ存する。建築は永久に土地のものである」（『山邑邸解説 新建築第1巻』南信）

山邑邸は、がけ崩れが多発する尾根の先端に据えられている。山の稜線を際立たせ、市街地の背後に豊かな緑の山を背負う芦屋の景観を強調し、人びとに山の緑や空の碧さをより鮮明に意識させる。先の武田氏の言葉通り、地域のアイデンティティとしての役割を長い年月の間に担うようになっていた。

一方、山邑邸の建築的学術的価値は、建築史上にライトが残した偉大な業績という流れから考えると、彼がこの山邑邸で実践した自然と建築のかかわり方であろう。

「起伏に満ちた敷地は、ライトに階を重ね、層を増し、数段の小階段によってたがいに床高の異なる各室を連結して、立体的構成に覚醒させる重要な契機を醸成する効果があったと言える。それは大地に密着し、土地の起伏に柔軟に作用しながら構築されて、第二黄金時代で見事開花する落水荘の成功を予測させる」（『ライトと日本』谷川正巳）

海と山を結ぶ芦屋川の「緑の都市軸」を「市民の公園」と位置付ける芦屋市にとっては、山邑邸は「シンボルゾーン」の中のランドマークとしても重要な位置を占める。

ライトが山邑邸で実践した自然と建築のかかわり方こそが、住民が愛するまちのアイデンティティとしての根拠であり、作品としての価値であり、行政の目指すまちづくりの核としての在り方そのものであった。住民、専門家、行政の三者の保存へのベクトルが一致し、エネルギーが結集し得た所以と言える。この地形の特殊性が、行政側に安全性検証のためにマンション建設の確認申請を保留させ、その僅かな時間に保存運動が結実し、建物の消滅の危機を救った。

■ 建て替え計画撤回、文化財として保存へ

1971（昭和46）年12月9日。所有者、兵庫県、芦屋市の3者会談が行われ、行政側が措置を考える時間がもたらされた。当時は文化財として指定を受けたいうえで、県と市または国が建物を買い取る方向での解決を模索していたようである。しかし、事態は急展開する。所有者である（株）淀川

製鋼所の内部でも計画の撤回が検討され、保存運動サイドに「建物の価値を再度確認したい」と申し入れられた。保存運動の代表が（株）淀川製鋼所の井上利行社長に面会すると、井上社長はその場で建て替え計画の撤回を表明し、さらに、文化財指定申請のための推薦文を要望するという劇的な展開を見る。一時は地上から消えるかと思われたこの建物は残され、コンクリート造の近代建築としては異例の早さで、国指定重要文化財の指定を受けることになった。

■ （株）淀川製鋼所 山邑邸を会社の「シンボルゾーン」に

（株）淀川製鋼所は、終戦後の1947（昭和22）年、政治家でもあった宇田耕一社長が政財界の賓客をもてなすための迎賓館として山邑邸を購入した。当時はライトの設計であることは知られていなかった。その後、建物は迎賓館としての役目を終え、社員寮として使われていた。購入から四半世紀、（株）淀川製鋼所は、雨漏りがひどく老朽化が進んだ山邑邸を解体し、マンションを建設することを決定する。井上利行氏は、迎賓館としての購入を当時の宇田社長に強く勧めた人物であった。当時の井上社長の思いを、（株）淀川製鋼所の社内報から知ることができる。

「あつとき、私は芦屋川から見たところの最もよい景勝地に、白亜のマンションをつくつた方がずっといいと思っていました。（中略）いろいろお話をうかがつて研究した結果、なるほどライトという人は偉い人だなということを認識したわけですから、急転直下、取りやめにしました。（中略）いろんな人が非常な熱意でこれを残してほしいと言つてきて下さつたからこそ、あの建物は残つた、とむしろ感謝しているくらいです」ここで使われている「シンボルゾーン」という言葉は、まさに、山邑邸が、国際文化住宅都市を目指す芦屋市の未来にとって不可欠であることを表現するために使われてきた景観上のキーワードである。井上社長は、この言葉に、会社と山邑邸がともに進む方向性を重ねていたのではないだろうか。続けて「今までは人を押しのけてでもやつていくというようなこともあつたのですが、結局においてそれは一種の敗北に帰着したし、事実エゴ以外の何ものでもなかつたわけですね。今後は『ロマンとリアル』の経営を理念の根本にしたい。ライト建築を『リアル』に潰さなかつたのもその一つの表れであると思つていただきたい」。

■ 山邑邸の今

現在、山邑邸は「ヨドコウ迎賓館 旧山邑家住宅」として週3日開館し、入場料500円を払うと自由に見学することができる。恒例となつた「雛人形展」には、約50日間の会期中に年間の入場者の半数の6,000人が訪れる。また、「芦屋音楽祭」、「芦屋再発見」などの観光ルートに組み入れられ、阪神間に花開いたモダンイズム文化の舞台として、芦屋の文化都市としてのブランドイメージに大きく貢献している。

運営する（株）淀川製鋼所の経営企画本部広報課に話を聞いた。会社の方針としては、山邑邸の運営に関しては、極

力企業色を出さない。見学者には「建築を肌で感じて欲しい」という思いから、表に出す説明パネルなどは最小限に留め、応接室の椅子に腰かけることや内部の写真撮影も許可している。雨漏り等の修理費用は国、県、市、所有者で案分されるが、維持管理にかかる経費等はすべて会社負担で、これらは文化的社会貢献活動として位置付けられている。活動が一過性のものではなく継続することを重視して、建物の活用方法を検討している。顧客を山邑邸の見学に案内することもあり、会社のステイタスシンボルとして社員にも親しまれてる。建材メーカーでもあるので、この活動が事業の利益にも繋がると考えられている。

企業の文化的社会貢献活動「メセナ」は、景気の影響を受けやすく継続が難しい。また、資金提供以外には企業と地域と協同の姿を見つけることの困難さも指摘される。山邑邸と（株）淀川製鋼所の場合は、保存運動を機に、美学を持った経営者が決断し、文化的な企業風土が受け継がれ、社会的責任と産業活動上の目的が重なつたこと、そしてこの建築に関係する人々の文化的な価値への認識の一致が現在の姿に繋がっている。

1998（平成10）年2月、芦屋市は山邑邸の敷地北側の緑地約1,000㎡を買収した。阪神大震災後、北側の開発計画により山邑邸の背後の緑が全く無くなることが明らかになつたためである。国、県、市の協力体制で「グリーンオアシス緊急整備事業」制度を利用して隣りの緑地を購入し、山邑邸の背景にあたる緑を維持することができた。それは最終的には市長判断であつたが、「法的にやむを得ない開発行為であつても、山邑邸の景観を損ねることには市民の理解は得られない」という芦屋市民の声が強く意識された結果であつた。

私にとって、子供の頃、見上げるだけだつた「山の船」は、今はいつ訪れても豊かな時間が過ごせる大切な場所となつた。今後もこの素晴らしい財産を皆で守り続けていくために、建築を感じ、当時の空気をしのび、光や風や緑、きらめく海を見るために、たくさんの人に家族や友人を誘つて足を運んでほしい。



4階の食堂より

〈参考資料〉
『つどい』2007年1月～2008年1月号 「近代洋風建築保存運動史」武田則明
『ライトと日本』1977年 谷川正巳
『旧山邑邸』2008年 谷川正巳
『旧山邑邸理解の為に』1972年 日本建築学会
『山邑邸見学会資料』1980年 兵庫県建築士会
『旧山邑邸の環境事業について』2011年 芦屋市
『清流』1974年 （株）淀川製鋼所